稱讃二四八号

二〇二三年八月一日発行

発行　浄土真宗本願寺派　稱讃寺
〒一二一―〇〇七五
東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号
TEL　〇三―五二四二―二〇二五
FAX　〇三―五二四二―二〇二六
HP　shousanji.com

お盆

亡くなられた先人たちのご恩に対し、あらためて思いを寄せるのがお盆である。親鸞聖人は仰せになる。

願土（がんど）にいたればすみやかに
無上涅槃（むじょうねはん）を証（しょう）してぞ
すなはち大悲（だいひ）をおこすなり
これを回向（えこう）となづけたり
『高僧和讃（天親讃）』

浄土へと往生した人は、如来の願力によってすみやかにさとりをひらき、大いなる慈悲の心をおこす。迷いのこの世に還り来たり、私たちを真実の道へ導こうと常にはたかれるのである。

仏の国に往き生れていった懐かしい人たち。仏のはたらきとなって、いつも私とともにあり、私をみまもっていてくださる。

このお盆を縁として、すでに仏となられた方々のご恩をよろこび念仏申すばかりである。

（『拝読　浄土真宗のみ教え』四二頁）

築地本願寺納涼盆踊り　２０２３年８月２日

去る七月十五日、親戚の太さんが亡くなった。彼は、母の妹の三人の子どものうちの長男であり、私とは一つ年下であります。小学校の頃までは、夏休みには、よく遊んでおりました。彼は大学に入り、二十才のころ、大病を患い、以来、手術を繰り返し、四十年間、その生活を支え続ける年老いていく母親の姿を見ながら、思い通りにならない身とともに、どれほど苦しかったか、それでも、一所懸命に命を全うしました。結婚をして、三男三女を授かり、鹿児島の稱讃寺の近くにお母さん（母の妹）と一緒に家族で住んで、お寺のお手伝いをしていたこともありました。十六日に、兄（稱讃寺住職）が勤め、法名「釋太宗」を授けました。私は、十六日の夜、鹿児島に帰省し、翌十七日のお葬儀で導師をつとめさせていただきました。

お母さんから、「信也ちゃん、子どもが前に亡くなるほど、辛いことはないよ」と聞きました。私は頷くだけでした。「そうだよね。でも、決して親不孝ではないよね」と、口では伝えませんでした。七日七日、お母さんをはじめ、家族が、稱讃寺にお参りしておられることをお聞きして、自然に「今、既に仏さまと成り、いつも傍に居てくれている」と味わっていかれることと思うのです。その夕刻、稱讃寺に戻ってきたら、ビハーラのお仲間の突然の訃報を聞きました。二十一日のお葬儀に参列させていただきました。数年前に転ばれて以来、コロナ禍の所為もあり、直接お会いすることが出来ずにおりました。ご家族だけのお葬儀とお聞きしておりましたが、ビハーラの他、多くの方々が参集になっておられました。仏さまと成られて、導いておられるのですね。

仏が説きたまえる盂蘭盆経

（書き下し文）

西晋月氏の三蔵竺法護訳す

是の如く聞けり。一時、仏、舎衛国の祇樹給孤独園に在せたもう。大目乾連始めて六通を得て、父母を度し乳哺の恩に報いんと欲す。即ち道眼を以て世間を観視するに、其の亡き母の餓鬼の中に生ずるを見る。飲食を見ず、皮と骨と連なり立つ。目連、悲哀し、即ち鉢に飯を盛り、往きて其れを母に餉る。母、鉢の飯を得て、便ち左の手を以て鉢を障え、右の手にて飯を摶るに、食未だ口に入らざるに化して火炭と成り、遂に食することを得ず。目連、大いに叫び悲号啼泣して馳せ還りて仏に白すに、具さに陳ぶること此の如し。

仏の言わく、「汝の母は罪根深結なり。汝一人の力の奈何ともする所に非ず。汝の孝順の声天地を動かすと雖も、天神地神、邪魔、外道道士、四天王神も亦奈何ともすること能わず。当に十方衆僧の威神の力を須いて乃ち解脱することを得べし。吾今当に汝が為に救済の法を説き、一切の難をして皆憂苦を離れ、罪障を消除せしむべし」と。

仏、目連に告げたまわく、「十方衆僧の、七月十五日の僧自恣の時に、当に七世の父母及び現在の父母厄難中の者の為に、飯百味、五果、汲潅盆器、香油、錠燭、床敷、臥具を具え、世の甘美を尽して以て盆中に著け、十方の大徳衆僧を供養すべし。此の日に当りて、一切の聖衆、或いは山間に在りて禅定し、或いは四道の果を得、或いは樹下に経行し、或いは六通自在にして声聞縁覚を教化し、或いは十地の菩薩の大人にして権りに比丘と現じて大衆の中に在るも、皆同じく一心に鉢和羅飯を受くれば、清浄戒を具する聖衆の道、其の徳汪洋たらん。其れ此等の自恣の僧に供養すること有らば、現在の父母、七世の父母、六種の親属、三途の苦しみを出づることを得て、時に応じて解脱し、衣食自然なり。若し復人有りて父母現に在せば福楽百年ならん。若し已に亡りせば［父母乃至］七世の父母は天に生じ、自在に化生して天の華光に入り無量の快楽を受けん」と。時に仏、十方衆僧に勅して、皆先ず施主の家の為に呪願して七世の父母を願い、禅を行じ意を定めて、然る後に食を受けしむ。初めて食を受くる時、先ず仏塔の前に安在して、衆僧呪願し竟りて便ち自ら食を受く。

爾の時、目連比丘及び此の大会の大菩薩衆、皆大いに歓喜し、目連の悲しみ啼泣する声は釈然として除滅す。是の時、目連の母は、即ち是の日に於いて一劫の餓鬼の苦しみを脱することを得たり。

爾の時、目連、復仏に白して言さく、「弟子を生める所の父母は、三宝功徳の力を蒙ることを得たり。衆僧が威神の力の故なり。若し未来世の一切の仏弟子にして孝順を行ぜん者、亦応に此の盂蘭盆会を奉じて現在の父母乃至七世の父母を救度せん。爾るべしと為すや不や」と。

仏の言わく、「大いに善し、快き問なり。我れ正に説かんと欲するに、汝今復問えり。善男子よ、若し比丘・比丘尼・国王・太子・王子・大臣・宰相・三公・百官・

振込先　城北信用金庫　一ツ家支店
名　義　浄土真宗本願寺派　稱讃寺教会　代表　北村信也
口　座　普通　6176051

振込先　ゆうちょ銀行　店名　四四八（ヨンヨンハチ）店
名　義　キタムラ　シンヤ
口　座　普通　2374851

仏が説きたまえる盂蘭盆経(現代語訳)

西晋月氏の三蔵竺法護訳す

万民・庶人有りて、孝慈を行ぜんとする者は皆応に生める所の現在の父母、過去七世の父母の為に、七月十五日の仏歓喜の日、僧自恣の日に於いて、百味の飲食を以て盂蘭盆の中に安じて十方自恣の僧に施して乞願わば、便ち現在の父母の寿命百年にして病無く、一切苦悩の患も無く、乃至七世の父母は餓鬼の苦しみを離れ、天人中に生ずることを得て福楽極まり無からしむ」と。仏、諸の善男子善女人に告げたまわく。「是の仏弟子にして孝順を修する者は、応に念念の中に常に父母を憶い、「父母」乃至七世の父母を供養せよ。年年七月十五日に常に孝順の慈を以て生む所の父母乃至七世の父母を憶い、為に盂蘭盆を作し、仏及び僧に施し、以て父母の長養慈愛の恩に報ぜよ。若し一切の仏弟子とならんには、応当に是の法を奉持すべし」と。

爾の時、目連比丘、四輩の弟子、仏の説く所を聞きて歓喜し奉行せり。

仏の説きたまえる盂蘭盆経

お釈迦さまのお弟子の一人で、六神通という超能力を得た目連さんは、我が身を養い育ててくださった両親の恩に報いたいと思い立ちます。

世の中の有様をみつめることができる勝れた智慧の眼でもって、亡くなった母を探したところ、あんなにやさしかった母は餓鬼の世界に堕ちていました。

飲物や食物はなく、骨と皮ばかりに痩せ衰えた母を見て嘆き悲しむ目連さんは、すぐさま鉢にご飯を盛りつけて、赴いてそれを母に手向けます。

母は喜んで鉢のご飯を受け取るや左手で鉢をおさえ、右手でご飯をつかんだが、まだ口に入らないうちに、ご飯は焔となって燃え上がり、炭になって、ついに食べることができませんでした。

目連さんは泣き叫び、悲しみの涙にくれて泣き泣き走り帰り、お釈迦さまに一部始終を話したのです。

お釈迦さまは諭して言われました。

「あなたの母が犯した罪は深く、あなた一人の力ではどうすることもできるものではない。あなたの親を思う孝心の誠がたとえ天地の神々の心を動かすとしても、どうすることもできない。この世にある多くの僧たちの勝れた力にあずかってこそ、母を救い出すことができるであろう。」とおっしゃり、その方法を説かれます。

「多くの僧が研究と修行に明け暮れた安居の最終日七月十五日の、「僧自恣の日」懺悔に集う日に、災難にあって苦しんでいる者のために、ご飯と種々さまざまな味わいをもつ食べ物、五種の果実・水を盛る器・香油・燭台・敷物・寝具を具え、この世の甘美を尽くしてお盆の中にしつらえ、全ての僧に供養しなさい。そして、これらの自恣の僧たちに供養するならば、生みの父母、七世の父母ばかりではなく六親眷属といった家族および関係のある人びとにいたるまで、全て三途の苦しみから逃れることができます。」と。

そして、お釈迦さまは多くの僧たちに、はじめに皆が施主の家のために祈願の言葉を唱え、七世の父母たちの福を願い、坐禅して心を静め、その後に飲食の供養を受けさせられました。

振込先　城北信用金庫　一ツ家支店
名　義　浄土真宗本願寺派　稱讃寺教会　代表　北村信也
口　座　普通　6176051

振込先　ゆうちょ銀行　店名　四四八（ヨンヨンハチ）店
名　義　キタムラ　シンヤ
口　座　普通　2374851

その時、目連比丘やこの大会に集まった菩薩たちは、皆ともに大いなる喜びに包まれて、目連さんの悲しみ泣く声はたちまち消え去りました。そして、この時に目連さんの母も餓鬼の苦しみから逃れることができたのです。

母が救われていく様子を見た目連さんは、再びお釈迦さまに申しあげます。

「私の生みの父母は、仏法僧の三宝の功徳の力を身に受けることができました。これは多くの僧たちの勝れた不思議な力によるものです。このことは、未来のすべての仏の弟子たちにも叶うことなのでしょうか。」

お釈迦さまはにこやかに、

「よく尋ねてくれました。皆の者よ、親を慈しむ孝心の誠を尽くさんとする者は、その人たちは皆、まず生みの父母や過去七世の父母のために、七月十五日の仏歓喜日といわれる僧自恣の日に、百味の飲食物をもって盂蘭盆の法会にそなえ、一切の自恣の僧に布施し願いなさい。そうすれば、あなたの有縁の人々は必ず救われます。」

その時、目連比丘ならびにお釈迦さまの弟子である出家・在家の人びとは、お釈迦さまの説かれる教えを聞いて、心から喜び、その教えを実践に移したのです。

※参照　『盂蘭盆経』藤井正雄氏著　「講談社」発行

【解説】

盂蘭盆会

太陰暦七月十五日を中心に七月十三日から十六日の四日間に行われる仏教行事。

サンスクリット語の「ウッランバナ」の音写語であるという説。「ウド・ランブ」の意味があるとされ、「倒懸」（逆さ吊り）の意味があるとされるが、「盆」の語は、経典では「器」の意味で使われている。「苦しみ」を説く経典ではないので、タイトルとしては正しくないと思う。

一方、古代イランの言葉で「霊魂」を意味する「ウルヴァン」が語源とする説。古代イランでは、祖先のフラワシ（ゾロアスター教における精霊）が信仰され、それが祖霊信仰と習合し、「祖霊」を迎え入れて祀る宗教行事となったとする。

二〇一三年、仏教学者の辛嶋静志氏は盂蘭盆を「ご飯をのせた盆」であると発表。それには、盂蘭盆経のうちに「鉢和羅飯（プラヴァーラ〈ナー〉飯」という語があり、これが旧暦七月十五日、安居（雨安居）を出る日に僧侶たちが自恣（雨安居）を行うことに関連付けられる。古代インドには自恣の日に在家信者が僧侶へ布施をする行事があったとし、それと盂蘭盆経が説く行為とが同じものであるとする。また、盂蘭盆の「盂蘭」はご飯を意味する「オーダナ（特に自恣の日に僧侶へ施されるご飯を強調）」の口語形が「オーラナ」を音写したもので、それをのせた「盆」を合せて、「盂蘭盆」であると説明される。（ウィキペディア参照）

安居

インドの仏教徒は、旧暦四月十五日から三カ月の雨期の間、外出すると草木・小虫を知らずに踏み殺すおそれがあるとして、洞窟や寺院に籠もって修行に専心した。これを雨安居といい、雨季に行う反省と学習。（『仏教語大辞典』中村元著）

僧自恣

安居が終わった最終日に、修行僧らが互いに自己の犯した罪を告白し、懺悔して許しを請う。（『仏教語大辞典』中村元著）

振込先　城北信用金庫　一ツ家支店
名　義　浄土真宗本願寺派　稱讃寺教会　代表　北村信也
口　座　普通　6176051

振込先　ゆうちょ銀行　店名　四四八（ヨンヨンハチ）店
名　義　キタムラ　シンヤ
口　座　普通　2374851

仏歓喜日

比丘の安居が終わる旧暦七月十五日をさす。（『仏教語大辞典』中村元著）

【浄土真宗としての私なりの受け止め】

目連さんは神通力を体得したことを亡きお母さんに報告するために会いに行ったところ、お母さんは餓鬼道で苦しんでいたわけですが、このお話に因んで私が思い出すことは、源信和尚（親鸞聖人が七高僧のお一人と尊敬しておられた方）とそのお母さんのエピソードです。

源信和尚は非凡なお方で、わずか十五歳にして村上天皇の前で『称讃浄土経』の特別講義をされる栄誉を得ました。終わって天皇から「僧都（そうず）」の位を賜るとともに多くのご褒美の品をいただきました。和尚は早速、この喜びを田舎で独り暮らしをしている母上に知らせようと、いただいたご褒美の品々とともに便りをしたところ、母上はそれらの品々に和歌を一首添えて送り返されました。こんな歌だそうです。

後の世を渡す橋とぞ思ひしに
世渡る僧となるぞ悲しき
まことの求道者となり給へ

お母さまは源信和尚に、「あなたが仏の道を求めて僧侶になったのは、人々を仏の国に導き、全ての人々を救うためではなかったのですか。それを天皇の前で講義し褒められたくらいで慢心し、出世を誇り吹聴するような僧侶になったとは、何と情けないこと。どうか、真に仏道に励んで多くの人々に真の教えを広め、おたのでありましょう。浄土に導く人となってください」と伝えたかっ

その母上の諫めの言葉にハッと気づいた源信和尚は、「己は何と頑魯（愚か）者であったことか。このような愚か者が救われていくにはどのような道があるのか」といっそうの精進を重ねられました。そして、自分が救われる道は阿弥陀如来のご本願しかないということに気づかれて、ともに人々にもお念仏を通しての浄土往生を勧められるようになりました。

一方の目連さんは、神通力を得た喜びで育ててもらった恩に報いたいと亡き母親に会いにゆき、そのことを母親に伝えれば喜んでもらえ、何よりのご恩返しになると思われたのではないでしょうか。しかしお母さんは喜ぶどころか餓鬼道に堕ちていました。それを見た目連さんは何とかしてお母さんを救い出そうとしますが叶いません。そこでお釈迦さまに訴えたところ、お母さんは我が子のためとはいえ、さまざまな罪を犯したことによって餓鬼道に堕ちたことを知らされます。お母さんは、自分たちが生きていくため、目連さんを育てていくために時には盗みまでしてなりふり構わず我が子を育てたのです。そのことを知らされた目連さんは、「ああ、母が犯した罪は、偏にこの私のためであったのか」と気づかされます。それまでは、亡くなった母は優しく恋しい半面で、外に向かっては悪いことをしていた母であったと内心では疑いの思いも持っていた。そんな母の子である私が立派な仏弟子になったのだからと、内心では誇りに思っていたのかもしれません。そして神通力をもって我が母だけを救おうとする態度こそが、実は餓鬼の道であることに気づかずにいた結果が、母親が餓鬼道に堕ちた姿になって現れたのではないでしょうか。

そのことを仏さまは、母親を餓鬼道に堕ちた姿にして目連さんの元に遣わし、目連さんを諭されたのではないでしょうか。つまりお母さんは、敢えて自ら餓鬼道に堕ちて、目連さんに「本当の仏道を歩んでください。神通力を得たことで悟ったなどと勘違いしないで、多くの人々を救いの世界に導いてください」と伝えたかったのではないでしょうか。

つまり、目連さんの母親も、源信和尚の母上も、思いはきっと同じだったのではないかと思うのです。

振込先　城北信用金庫　一ツ家支店
名　義　浄土真宗本願寺派　稱讃寺教会　代表　北村信也
口　座　普通　6176051

振込先　ゆうちょ銀行　店名　四四八（ヨンヨンハチ）店
名　義　キタムラ　シンヤ
口　座　普通　2374851

そして、僧侶が懺悔をする日に、全ての僧侶に衣食住のお供えをすることにより、お母さんも含めて、目連さんの有縁の人々も救われていく様子を見ながら、皆が大いに喜びました。

この情景は、何を意味しているのでしょう。

目連さんたちは、お釈迦さまを尊崇（帰依）し（仏さまに帰依）、お釈迦さまの説法を聞き信じる（法に帰依）しておられました。そして施主（在家信者・僧侶）のために懺悔する僧侶に感謝の意をもってお供えするという行為は、お互いを仲間として尊敬し合う（僧（サンガ）への帰依）ことを意味します。「仏・法・僧」の三宝に帰依することで、目連さんたちが気づかされたことは、お母さんをはじめ、この世での命が無くなった有縁の方々、この度の豪雨などで亡くなられた方々は、お浄土に生れ、仏さまになっておられたことと受け止められるようになり、さらに、この私もいずれ、必ず、同じくお浄土に生れ、仏さまになさしめられると知らされたからこそ、よろこばれたのでしょう。

そして目連さんは、お釈迦さまに、「後の人々も仏・法・僧に帰依すれば、それらの有縁の人々も救われるのですか」と尋ねました。するとお釈迦さまは「よくぞ気づいてくれました。」と大いに喜ばれ、「まさにそのとおり、仏・法・僧に帰依することである」とおっしゃるのですか」と尋ねた行為も、自らなした慈悲ではなく、そこに導いてくださった仏さまのお慈悲を感じずにはいられません。

このことから〝仏道を歩む〟とは、ただ特定の人を救うためではなく、全ての人々が平等に救われるべきであり、自分だけの仕合わせ、悟りを求めるのではなく、全ての衆生は、必ず仏さまに成らしめられるのであることを『仏説盂蘭盆経』は、私たちに教えているのではないでしょうか。

親鸞聖人は、「慈悲に聖道・浄土のかはりめあり」（『歎異抄』第四条）と常日頃おっしゃっておられました。

目連さんのお母さんのように、我が子を思い、我が子のためならどんなことをもし、どんな報いをも甘んじて受けようと思うことは、〝自力の慈悲〟といえましょう。また、目連さんが餓鬼道に堕ちた母親を最初に救けようとした行為も、自力の慈悲といえます。しかし、それはどちらも思いどおりになすことはでき得ません。

しかし一方のお母さんは亡くなった後、仏さまのお使いとなり敢えて餓鬼道に堕ちたのだと見れば、目連さんを導くための〝他力の慈悲〟といえましょう。そして目連さんが多くの僧侶に布施をし、最後にお釈迦さまに「後の人も同じようにすればそれら有縁の人々は皆、救われるのですか」と尋ねた行為も、自らなした慈悲ではなく、そこに導いてくださった仏さまのお慈悲を感じずにはいられません。

気づけば、生前の母親の行為も、目連さんの行為も、仏さまの働き（お念仏）を通して仏法に導いていたのであります。それを親鸞聖人は「念仏申すのみぞ、末通りたる大慈悲心なり」とおっしゃったのであります。

そして『歎異抄』の第五条では、「親鸞は父母（ぶも）の孝養（追善供養）のためとて、一返（いっぺん）にても念仏申したること、いまだ候はず」とおっしゃいました。お盆は、亡くなった自分の祖先を追善するためにするのではなく、この私を仏道に導き、「南無阿弥陀仏」のお念仏に出遇わせてくださったことへの報恩感謝の日であります。

「仏・法・僧の三宝に帰依する」と言われても、なかなか真から帰依することのできないのが私たちでありましょう。

しかし、「私が拝んでいるときも　私を拝んでくださり　私が拝んでいないときでも　私を拝んでくださっておられる」のが仏さま（阿弥陀さま）といわれる所以であります。

日ごろ、自分の都合だけを考えて生活する私たちですが、盂蘭盆会などのご法要に合う度、お仏壇の前に座ったとき、あらためて有縁の方々は〝仏さま〟と手を合せたいことです。

振込先　城北信用金庫　一ツ家支店
名　義　浄土真宗本願寺派　稱讃寺教会　代表　北村信也
口　座　普通　6176051

振込先　ゆうちょ銀行　店名　四四八（ヨンヨンハチ）店
名　義　キタムラ　シンヤ
口　座　普通　2374851

ミダ　チガンカイスイ
弥陀の智願海水二
シンスイ
ワレラガ信水イリヌレバ
シンジツホウド
真実報土ノナライニテ
ボンノウ　ボダイイチミ
煩悩・菩提一味なり
ボムナウトクドクトヒトツニナルナリ

国宝の草稿本（三重県・専修寺蔵）では、弟子がこの和讃を書写しており、真筆が確認されるのは極めて珍しい。

「衆生を救済する阿弥陀仏の本願の力で、煩悩と悟りが一つの味わいとなる」という内容で、他の史料から晩年の１２５６年作とみられる。本文の脇に読み方を示すカタカナが付いている。

同市の市史を執筆した津田徹英・青山学院大教授（日本美術史）が、調査の過程で掛け軸になった墨書を発見。「眞」の２画目の横の線が長いなど親鸞の筆癖が顕著に表れているといい、同朋大仏教文化研究所研究顧問の小山正文さんが真筆と判断した。

１２５７年に編まれた国宝の草稿本「正像末和讃」には４１首あり、最初の９首は親鸞の真筆。草稿本では、大円寺蔵と同じ和讃が２１首目に記され、読み仮名はなく註釈が添えられている。小山さんは「今回の真筆も草稿本も和讃を分かりやすく伝えようとした努力の跡がうかがえる」と話す。大円寺が所属する真宗大谷派総務部は「ご真筆の和讃を通じ、時を超えて宗祖の願いや思いを肌で感じることができる。宗派としても大変喜ばしい発見」としている。

読売新聞オンライン
（２０２３／７／１９）より

この和讃は、書写本には掲載されておりましたから『浄土真宗聖典註釈本』並びに『真宗聖教全書二宗祖部』にも、元々掲載されております。親鸞聖人の直筆が発見されたことは、この和讃は、他の人の創作ではなく、親鸞聖人独自のお心が詠われていることが明らかになったのです。

親鸞直筆見つかる
：仏教賛歌にルビでわかりやすく

浄土真宗の開祖・親鸞が七五調で詠んだ仏教讃歌「和讃」の真筆とみられる墨書が、滋賀県近江八幡市の大円寺で見つかった。親鸞の著作の一つ「正像末和讃」（全１１６首）の１首。

そのことを、『新しい領解文』の「私の煩悩と仏のさとりは　本来一つゆえ」の正当性を明かしたと我が意を得たるとまで仰る方もおられます。このご和讃に似たご和讃もあります。

『高僧和讃（曇鸞讃）』に「名号不思議の海水は　逆謗の屍骸もとどまらず　衆悪の万川帰しぬれば　功徳のうしほに一味なり」「尽十方無碍光の　大悲大願の海水に　煩悩の衆流帰しぬれば　智慧のうしほに一味なり」があります。また、この二つのご和讃の前に、「罪障功徳の体となる　こほりとみづのごとくにて　こほりおほきにみづおほし　さはりおほきに徳おほし」とあります。「氷＝罪障・煩悩」が阿弥陀さまの智慧と慈悲の光に照らされて、「水＝阿弥陀さまの功徳・智慧に融け込んだ状態」ということであります。

「ワレラガ信水」とは「氷の煩悩の心が、阿弥陀さまの功徳によって阿弥陀さまのご本願を信じる心」ということでしょう。それは「阿弥陀さまのご本願を信じる、または信じたい」という私の心なのではないでしょうか。しかし、あくまでも私たちの煩悩の心ですから、仏さまの心とは同じにはなれないと思います。ですから、「一味」ではあっても、「一つ（同じ）」とは成れないと思います。

「弥陀の智願海水」「名号不思議の海水」「尽十方無碍光の大悲大願の海水」は阿弥陀さまのはたらきは、確かにこの世（現世）においてはたらいているとの表現であり、だからこそ、煩悩のままの私をそのまま融け込ませる、包み込んでくださっておられるのであります。

「只今、私と仏さまが一つだから」と誤解しないようにしたいものです。

振込先　城北信用金庫　一ツ家支店
名　義　浄土真宗本願寺派　稱讃寺教会　代表　北村信也
口　座　普通　6176051

振込先　ゆうちょ銀行　店名　四四八（ヨンヨンハチ）店
名　義　キタムラ　シンヤ
口　座　普通　2374851

稱讃寺　八月行事予定

のんのん法話会

６日（日）PM２：００

２０日（日）PM２：００

２６日（土）PM３：００

※８月１４日（月）～１７日（木）までは鹿児島・稱讃寺のお盆参りで帰省いたしますので、不在しております。

悲しみ痛みに共感できる自分でありたい

二〇二三年「心のともしび」八月カレンダーより

お詫びと訂正について

先月号にて「築地本願寺親鸞聖人御誕生８５０年・立教開宗８００年慶讃法要」ご懇志の依頼状に記載しました「ゆうちょ銀行」への振込について口座番号が間違っておりました。大変ご迷惑をおかけ致しましたこと申し訳ありません。訂正を掲載し、電子振替方法も追加いたします。

記

振　込　方　法

①城北信用金庫　一ツ家支店
　名義　浄土真宗本願寺派　稱讃寺教会　代表　北村信也
　口座番号　普通　6176051

②ゆうちょ銀行　店名　四四八（ヨンヨンハチ）
　名義　キタムラ　シンヤ
　口座番号　普通　2374851

③ゆうちょ銀行電信振替
　受取人口座番号　14430-　-23748511
　おなまえ　北村信也（キタムラ　シンヤ）

編集後記（愚案）

親鸞聖人の後を引き継いだ本願寺（僧侶・門信徒）は、「人間と、その人間による社会の、愚かさ悲しさが「痛み」として受け止められず、所詮煩悩だらけの心であり、「どうにもならない当然の姿」としてゆるしていくことに陥りました。現実を「問う」ということはなくなり、「問う」ことはむしろ反対にこざかしい自力の姿だとして排除しました。現実の愚かしい己をそのまま許し、また力による支配関係で成り立つ現実の社会をそのまま認め、かつそれに乗っかることで自らの立場を存続させようとしました。そのようなあり方が、アミダ仏の救いの対象であると言い、必ず命終わるときに浄土に往生して仏になると聞いて安心する。あとは「ただほれぼれと」喜ばせてもらって、報謝の念仏を称えると。「報謝」とは何をすることなのかと言えば、念仏を口に称えることでしかありません。」と、野世信水氏は『親鸞さんはなぜ神を拝まなかったのか』（永田文昌堂発刊）の中で述べられておられます。そして、阿弥陀仏への報謝とは、阿弥陀仏のお心（ご本願）を私の生きる拠り所と仰ぎ、私がこの現実社会で生きること。「痛み」を感じ、現実を「問う」営みであり、そのような「生きる姿勢」が信心であり、「正定聚」に入った姿だともおっしゃる。ご門徒さんから「ご信心頂かれておられますか」と尋ねられたことが思い出され、恥じるばかりです。

門信徒会費　6千円　お預かり管理費　5千円　永代使用積立金　5千円から